

公益社団法人 日本給食サービス協会会長賞

『いただきます。』

茨城県神栖市立波崎西小学校 六年一組 男子 八馬 春人

「今日、学校に行きたくないなあ。」そうつぶやくと、母がすかさず給食のこん立を見る。

「そうか、今日は苦手なメニューだったね。」

そう言って笑った。人の気も知らないでカチンときたぼくは「こんなの食べなくても死なないし。」とふてくされたように言った。その時母の表情がガラッと変わり、ぼくはハッとした。

ぼくの祖父の家では牛を育てている。前に遊びに行った時、子牛がいた。いつもは大きな牛ばかりで怖くて近寄れなかったけど、子牛はとも小さく、ミルクを飲む姿がかわいかった。どうにか仲良くなりたくて週末にお手伝いもした。祖父と祖母の朝は早く、休みもない。牛にご飯をあげながら、食べる量や元気がない子はいないか、一頭ずつ観察する。ふんの片付け、小屋の清掃、見回りなどとても忙しい。きれいな仕事でもないし、重労働だ。子牛にミルクをあげるのも簡単ではない。小さくても力は強いし、しっかりピンを持っていないと、ふり回されそうだ。それでも祖母は、「大丈夫だよ。」とまるで赤ちゃんにでも言うように優しく声をかけていた。ぼくは勝手に名前まで付けてかわいがっていた。何度かお世話をして、立派に育ったその牛は、とぜんいなくなった。祖父に聞くと、真面目な顔で話してくれた。ここにいる牛達を自分の子供のように思っていること、体調が悪い時は、お医者さんにも見てもらうし、毎日愛情こめて育てていること。そうして健康に育てた命は、ぼく達が生きるために食材として使われること。ぼくの胸が痛くなった。あれほどかわいがって、大変な思いをして、大切に育ててきたのに。かわいそう。初めはそう思ってたたくさん泣いた。だけどみんなの話を聞いて分かった。牛肉もぶた肉もと肉も元はぼくと同じように生きている動物で、たくさん命を食べて、ぼく達が生かされていること。また、祖父の他にも見えない所で、命を加工する人、調理員さんなど、多くの人が関わってようやく食事が食べられるという事を思い知った。

そんな事があったから、母はおこったのだ。食べられない事ではなく、ぼくの心ない発言に。たくさん命を粗末にしないために、感謝の気持ちを持つ事。どうしても食べられない時は、「ごめんなさい。」の気持ちを持つ事が大事だとぼくは思った。ぼくはこの時から、きちんと「いただきます。」と言えるようになったと思う。

そういえば今日のメニューには、神栖特産品のピーマンが入っている。ぼくの苦手なピーマン。けど、神栖メンチになって出てくれば大好物メニューの一つだ。調理員さんの手にかかれば、苦手な物も好きになれるかもしれない。「とりあえず食べてみる。」そう言ってぼくは今日も元気に学校へ向かう